

ことばで世界・他者・自己を探究する子どもたち —「てつがく」を通してことばを発見する—

北浦貴之(山梨県都留市立宝小学校)

「どうして友達とケンカしても仲直りできるの?」「死んだら、どこに行くの?」「宇宙に外ってあるの?」こうした、子どもたちが生活の中で見つけたふしぎについて、車座になって顔と顔を合わせ、おたがいの声を聴き合い、語り合い、共に考えることで、世界や他者、そして自分自身を発見し、世界を新たに生き直す。「こどものてつがく(Philosophy for Children: P4C)」は、こうした対話と探究をめざした実践である。2014年度から、この「こどものてつがく」を実践する中でわたしは、「てつがく」する子どもたちのさまざまなことばや姿に出会い、そして、子どもたちの変化に驚かされてきた。そこでわたしは、子どもたちとの世界や他者、そして自己の絶えざる描き直しとしての「てつがく」の世界を記述することを試みてはどうだろうか。そして、その記述を媒介として「てつがく」の世界を都留に生きる子どもたちや教師たちと共に味わう場を学校の中に拓いていくことはできないだろうか。さらには、「書くこと」に注目しながら、子どもたちがわたしたちを連れていくであろう新たな「てつがく」の世界を探ることはできないだろうか、と考えるようになった。この三つが、本研究の目的である。

本研究は、2021年度・2022年度の2ヵ年での研究である。初年度である2021年度には、所属校での担任学級である3年生教室で「てつがく」の実践を行った。そして2022年度には、山梨県教育委員会の国内大学留学生の制度のもと、都留文科大学に研究生として所属し、(1)都留市内三校での実践、(2)海外・国内でのp4cの視察(p4c Hawai'i、兵庫県での金澤正治氏による実践、佐渡の小学校における実践、お茶の水女子大学附属小学校での「てつがく創造活動」等)、(3)学会・研究会での発表・報告(「子どもの哲学国際学会(ICPIC)」での研究発表、都留文科大学地域交流研究センター刊『フィールド・ミュージアム研究』の創刊号への寄稿等)(4)都留市での「こどものてつがく」に関する研究会の実施を主な研究方法として実践的な研究に取り組んだ。

以上の研究を通して、次のことが「てつがく」について見えてきた。まず、「てつがく」は書くことから始まるということだ。詩や日記にも「てつがく」が息づいている。さらに、その「てつがく」が息づく詩や日記を読み合うことは、自らの生活を見つめ直す対話のきっかけとなることが見えてきた。また、書くこととしての「てつがく」は、〈探究の生活〉の実践として、子どもたちが自らの住む地域の暮らしや仕事の現場を訪ね、世界と出会い、そこで見、聴き、感じ、考えたことを綴る『こどもフィールド・ノート』の試みへと姿を変えていった。そして、これらの書くことに息づく「てつがく」、書くことから始まる「てつがく」は、生活綴方教育において探究されてきたことでもあった。その生活綴方教育の中で東井義雄は、子どもたちが、自らの見方や感じ方、考え方、生き方を形づける論理や認識を「磨きあう」過程としての対話を、〈ことばをあためる〉過程として探っていた。その東井の対話の理論は、p4cの理論としても力があることが、わたし自身の「てつがく」の実践の中から見えてきた。

次に「てつがく」の経験の記述について。本研究では、「てつがく」の経験を「てつがく通信」として子どもたちや教員に向けて記述することを試みた。その「てつがく通信」は、〈開かれた内省〉のことばで「てつがく」を語る場となり、「てつがく」の経験そのものを変化させた。対話において、ある子のことばに答えることが、そのままその子の生(life)へ応答することであるように、聴き、語る可能性を探るきっかけとなったのである。また、〈開かれた内省〉のことばで「てつがく」を語ることは、「てつがく」に限らない教師それぞれの探究の物語を語る場を拓くことにつながる可能性があることが見えてきた。

最後に、「てつがく」はことばとの出会い直し、ことばの発見の経験であった。〈ことばをあためる〉、〈scratching beneath the surface〉、〈開かれた内省〉。本研究を通して見えてきたこれらのことばに導かれる先に出来た「しあわせ」についての「てつがく」を通して、子どもたちは「しあわせ」ということばの意味を再発見すると同時に、ことばそのものを「たくさんの形がある」ものとして発見していった。「てつがく」を通して子どもたちは、ことばと出会い直し、そしてことばそのものの在り方やふるまいを発見したのである。

詩や日記を綴ることに息づく「てつがく」。詩や日記を読み合うことではじまる「てつがく」。そして、〈探究の生活〉の実践として展開していった『こどもフィールド・ノート』の試みとしての「てつがく」。本研究を通し、「てつがく」のもう一つの可能性を、子どもたちと共に探ることができた。そして「てつがく」は、子どもたちにとって、ことばと出会い直し、ことばそのものを発見する経験となることが見えてきた。